

平成9年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (二二)

第二二則 地藏種田

〔示衆〕

衆に示して云く、才士は筆で耕み、弁士は舌で耕む。我が衲僧家は、露地の白牛を看るに慵く、無根の瑞草を顧みずして、いかんが日を度る。

〔本則〕

挙す、地藏、脩山主に問う。なんの所より来る。
〔来る処を知らずと道い得てんや。〕脩云く、南方より来る。〔好し、下載を与うること。〕蔵云く、南方は近日の仏法はいかん。〔行も説も好し、話ること。〕脩云く、商量浩浩の地なり。〔低声なれ。〕蔵云く、いかでか如かん、我が這裏にて田を種え飯を搏めて喫するには。〔少売弄なり。〕脩云く、三界をいかんせん。〔なお這箇のあり。〕蔵云く、你、なにを喚んでか三界と作す。〔南方はなお可なり、北方は更に瞞し。〕

「地藏種田」の地藏とは、唐末の桂琛和尚（八六七〜九二八）のこと。地藏院や羅漢院に居住したので、地藏や羅漢と呼ばれている禅匠です。『従容録』では第二〇則「地藏親切」があり、すでに第八回で紹介済みですね。

この方は、雪峰・玄沙・地藏・法眼とつづく禅門の系譜にランクされ、青原下ではたいへん重要な地位にあります。今回の「種田」は、弟子であり道友でもあった脩山主との問答。脩山主はのちに江西省の竜濟山に禅道場を開いた人で、紹脩が本名です。この人が雲水のとき、福州城西の地藏院に桂琛さんを訪ねた際の機縁がこの則です。

まず万松の「示衆」は、この則の全般的な風光を示しています。「文才の者は文筆ではげみ、弁才の者は弁舌ではげんでいるというのに、わが禅門ときたら、さとりをひらくのをおこたりわすれているヤツばかりで、いったいなんというダラシのない日送りをしているんだろう」といった辛らつな毒舌警語です。「露地の白牛」も「無根の瑞草」もボンノウをこえた悟境のこと。

いったい、なぜ万松はこんな毒舌を発したのか。それには「本則」をみなければわかりません。例によって、要訳





桂琛が修行した雪峰山

してみよう。

桂琛が脩山主にたずねた。「お前さん、どこからやって来たネ」「南方からです」「ホウ、南方ではこのごろどんな仏法がはやっているんかネ」「問答商量がさかんです」「ホウ、だがわしのとこで田んぼを作ってニギリ飯を食べているのにはとても及ばんナ」「それでは、およそ三界出離はどうなりますか」「ウン、だがネ、いったい三界って何だネ」

この問答の結果はのべられていません。が、紹脩はきつと気づいたものがあつたことでしょう。問題は、こうした禅匠たちの禅機を

わたしたちがどうとらえ、いかに現実の生きる糧にできるかということ。頭の理解だけでは、そこそそ桂琛さんのいうとおり、農耕をしたほうがずっとましといわれてもしかたありません。

だいたい、禅門では問答商量はいのちがけでした。とくに、まだ禅が概念化も固定化もなされなかつた唐代には、問答はみな生きた禅機であり真剣勝負でした。だから「どこから来たか」という問いは、場所と同時に人の本性を問うギリリとした問いだったのです。

ところが「南方」。そこで今度はどんな仏法かと聞いたらば「問答商量」。紹脩が自分自身の問題であることを何もわかっていないのを見ぬいて、桂琛さんはあえてそんな問答商量をしているのなら、わしのところの農耕のほうがましだと教えた。これは、南方の禅問答が自分自身の問題になつていないことへの非難でもあります。

いま、それを特定する必要こそありませんが、唐末ごろから徐々にみられる禅問答の定型化の悪弊が、すでに桂琛によって適確に指摘されているのは重要です。

問答の定型化とは、ネコもシャクシも「いかなるかこれ仏」「いかなるかこれ本来の自己」のように

なること。言葉の遊びに近く、その裏づけとなる実践がかくれ、何の緊迫感もなくなります。そんな杞憂から、桂琛は農耕のほうがよいといったのです。万松のこれに對するコメント「少売弄」とは「ご自慢なことよ」の意味。

さて紹脩も、農耕の意義を知らないはずはありません。だが、百姓仕事でさとりが開けるとは思えなかつた。そこで三界出離についてたずねたというわけです。つまり、三界という生死のしがらみの世界からの透脱です。このところの万松のコメントは適確です。「なお這箇のあり」とは、「ヤレ、三界にひっかかっているワイ」。

そのとおりです。道元禪師は「生死の中に仏あれば生死なし」と教えているではありませんか。悲喜こもごもの生活体験の中にいます仏が、仏としてはたらき出したとき、もう生死へのこだわりのないさとの生きさまだということ。

わたくしは先日、高速道で大渋滞に遇い、三〇キロを三時間もかかりました。その間、なかなか聞くチャンスのなかつた昨秋の「禅を聞く会」のテープを、お陰で全部じっくり味わうことができました。あせりや怒りどころか、宗教的充足を与えてくれた渋滞に感謝する

ばかりです。

すると、桂琛さんが三界などの言葉にこだわる紹脩に「いったい三界って何だネ」と反問した意味がわかってきますね。そこには、桂琛の何ものにもとらわれずに悠々と農耕にいそむ道人の禅境がくみとられます。

『正法眼蔵』三界唯心の巻は、世界のすべてが心のあらわれである道理を説きますが、そこにもこのテーマについての玄沙と桂琛の問答が引かれています。つまり、桂琛は三界を究めつくしながら、それを超えた人だったのですね。

唐代の禅道場の多くは、自給自足の経済体制をとりました。そこからは、作務と坐禅は同じ修行という価値観が生まれました。「作務」の言葉は五祖弘忍にはじまり、それは農耕を意味していました。桂琛さんの地藏院ではさかんに農耕をしたようですから、禅は生活体験そのものとして生きていた。言葉よりも実践が先行する生きかただったのですね。

こんにち日本の禅道場では、農耕も普請も忘れ去り、作務は掃除と炊事のみ。「作務」が農耕の意味だったことも知らないとは、なんと残念なことか。わたくしは、生涯百姓坊主に生きたいです。

参禅会発足二十五周年記念講演会

「禅を聞く会」

— 仏教の法悦に感銘 —

講演 1

■ 肚の文化 ■

大乘寺専門僧堂堂長・師家
板橋興宗老師

講演 2

■ 私って何でしょう ■

駒澤大学学長・文学博士
奈良康明先生

講師さま接遇準備より

浦和市 美川 武弘

③

平成八年一月四日午後、柏市長全寺飛雲閣において、龍泉院参禅会発足二十五周年記念行事の第二弾として、春の「中国禅門五山巡拝の旅」に続き、秋の記念講演会が開催されました。

椎名宏雄老師のご尽力により、講師は仏教界を代表する碩学名徳の奈良康明先生と板橋興宗老師という、現在望みうる最高の御二方をお迎えすることができました。

また二大講演の間に、柏市花野井の大洞院、木村誠治老師による椅子坐禅のご指導がありました。

会場となった長全寺様には、下見の段階から当日に至るまで、接客、進行など多大なご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

この講演会は、企画の初段階より、椎名老師のご指導のもと、会員それぞれの役目に励み、すばらしい記念講演会とすることができました。

両講師はユーモアやエピソードを交えて、わかりやすく禅のお話をしてくださり、当日来場した四百余名の聴衆は、時に聞き入り、またある時は爆笑にわきました。そしてこの刻に居合わせたご縁に感謝し、禅の風光に触れて、大きな感動とすばらしい仏教の法悦に包まれました。

昨年七月、参禅会誕生二十五周年記念行事の最後を飾る一大イベント、「禅を聞く会」公開講演会の準備委員会が開かれて、実施要綱、役割分担などの大綱が決まり、係別の責任者もそれぞれ決定された。畏友添田さんが講師接待係の責任者に選任され、図らずも、新参者の私共夫婦がその補佐役に指名された。

参禅会の仲間に入れていただいていたまだ日も浅く、宗教については、浅薄な私共にとつて、この大役は余りにも荷が重く、気も重い。再三思三考の末の結論として、「日頃、滅多にお話する機会のない、高名

な方々を身近で、しかも、直接おもてなしすることは大変光栄であり、チャンスでもある」と無理に理由をこじつけて己れを納得させ、洩る女房どのを説き伏せて、この身に余る大役を引き受けることに決めた。

接遇に万全を期すためには、まず、会場の下見が肝要と考え、長全寺の「飛雲閣」の諸施設を見学することにした。

長全寺のご厚意により講師控室は二階の特別室「龍翔の間」を使用することになった。「龍翔の間」は、高級旅館にも優るとも劣らない設備を備え付けた立派な和室で



講演に先立って挨拶なさる椎名老師

ある。「龍翔の間」周辺の施設の配置状況などを調べてから、一階の舞台（講演会場）までの誘導経路、エレベーターの場所などを確認する。

また、長全寺のご住僧からも色々のご指示をいただいたり、接客上の助言やら、禅宗独特の接待作法「梅湯の供し方」について詳しくご教示を賜わった。

「梅湯による接待」という禅宗の接待作法を、この時初めて知った。大変参考になり、勉強にもなった。

偶然なことに、長全寺には、かつて板橋老師の膝許の大乗寺で修行僧として、ご老師に師事し、直接ご指導を受けたというご住僧が居ることが分かり、奇遇に驚かされた。これは正に百人力の味方を得たようなものだ。

このような機縁もあつてか、長全寺としては全面的な協力を約束してくださり、ご厚意に感激させられたものである。

会場の下見の次は具体的な接客方法を検討してみることにする。

接客の場面を大きく、送迎、接遇、誘導の三つに分け、それぞれの留意点を整理し、方針と方法を決めた。

その上で、具体的な接客スケジ

ュールの作成に取り掛かる。控室での講師の接待は特に気を使い、遺漏なきよう注意を払い、講師間の鉢合わせが起これらぬよう時間配分に充分配慮して、分刻みの行動プランを考えた。

さて、あとは本番を迎えるのみだ。万が一にも手違いが生じ、ミスが起こっても、冷静に、臨機応変に対処するとしよう。誠意をもって最善を尽くせば事態は好転するものである。

今回、わが参禅会がお迎えする講師は、仏教界を代表する重鎮のお二方である。

接待係を拝命した以上は、椎名老師をはじめ、龍泉院参禅会の名を辱しめぬよう、心して接遇に努めようと決意して臨むことにした。あとは、ひたすら講演会の無事成功を祈るのみである。

ご承知の通り、講演会は成功裡に幕を閉じた。大成功の原動力は、何といっても、参禅会会員各位の心からの熱意と献身的なご尽力の賜物に他ならない。

また、私共がお役目を無事に果たせたのも、椎名老師はじめ、先輩諸氏の並々ならぬお力添えの賜物と深く感謝申し上げます。特に、椎名老師、幹事の小畑さんは自ら

陣頭に立たれ、率先垂範、接客の範を示された。そのお姿は大変印象的であり、無言のうちに多くのことを教えていただいた。ここにあらためて心から厚くお礼を申し上げます。

合掌

余談ながら、長全寺のご住僧よりご教示いただいた、禅宗の接待作法、「梅湯の供し方」について紹介しておこう。

禅宗の寺院では、賓客としてお迎えする客人に対しては、まずは、「到着梅湯」といって、梅湯を供するのが禅宗の接待作法なのだそうである。

梅湯というのは砂糖入りの白湯を梅干しとともに喫するもので、洗練された茶の湯の御点前とは一味違って、大変素朴で質素ながらも、肅然たるものが感じられ、「これぞまさしく禅の接待作法なり」と感心したものである。

供し方は、やや多目に砂糖を入れた茶碗に白湯を注ぎ、高茶台にのせ、種を取り除いた梅干しを半分にして、形を整える。その半分の梅肉を割箸の先端に挟んで、茶碗の上に、挟んだ梅肉が左に位置するように置く。

客人に供するときは、割箸が客人の手前になるように右廻りにし

て差し出す。

客人は梅肉を白湯に入れ、甘味と酸味で程よく調和された白湯を、ゆるりと味わいながら喫していたのだのである。

この禅宗の梅湯による接待作法については、私なりに大変興味を覚えた。禅と梅湯との関わりについて、故事来歴を詳しく伺うことができなかったのは残念であった。

記念講演会の

舞台の袖にて

柏市 今泉 房子

二五周年記念講演会に参加させて頂きありがとうございました。二〇周年記念講演会から五年、振り返りますと坐禅会からも遠のき、とても会員とはいえない様な現状でありますのに参加させて頂きました事は、唯々入退会自由との主旨によるご縁と感謝申し上げます。

このたび、会より頂戴致しましたお役が司会とのことに、初めは驚きやら、不安やら、とてもすぐにお引き受け致しますというわけには参りませんでした。が、会員の皆様が各自の役割を着々と進められていた事を思い、また、上手に司会する事だけが目的ではない

と気づき、司会の大役を務めさせて頂く事に致しました。

会の始まる直前まで、会員の方々は右に左にと体を動かし、それぞれの持ち場の確認に懸命の働き、まさに「随所に主となる」の姿を見させて頂きました。そしてこの光景を見ながら、椎名先生が常々仰せられる「坐禅をすることだけが禅ではない」との言葉を思い出しました。

開演以降は順調に進行、司会にとつては皆様の大きな車に乗せて頂き、安心して終点迄着く事ができました。来場者は四百名にも及び満席、中には百才の男性もおられたとのこと、会員の来場者一人一人への心配りにより、終了後には、会場を立ち去り難い風景が見られ、そして「良い会でした」との言葉も方々で聞かせて頂きました。これは講演者であられた板橋老師・奈良先生によるものばかりではなく、会員皆の講演会を成功させたいと云う、熱い心に尽きると思われました。

講演会は企画の段階から一つ一つ進められ、当日の舞台はそのフイナーレ。舞台の土台は、本堂で坐る時の坐禅心をあらゆる場所で見えない所で働かせ行動する行によって支えられており、陰徳を積

む世界を教えられました。

会員の心遣いが来場者に響き、老師の慈悲あふれる言葉に、皆様の顔がだんだんと大安心の気色となり、感応道交というのでしょいか、すばらしい会であったことを、舞台の袖にて強く感じる事ができました事を、報告させて頂きます。

「禅を聞く会」

印象記

柏市 杉浦上太郎

昨年一月四日、全会員待望の参禅会発足二五周年記念行事の第二弾「禅を聞く会」が開催されました。

その準備のために、椎名老師監督のもと小畑代表以下三〇名の会員諸氏によって準備委員会が編成され、六月から半年間の長きに渡って準備活動がなされました。

九月の準備委員会の時は、折あしく台風一六号通過の真つ直中であったにもかかわらず、会場である長全寺様の飛雲閣下見が決行されたのであります。

当日月例参禅会・御法話・茶話会後の打合せには、平素お仕事の都合上なかなか出席できにくい清水さんですが、暴風雨の中、遠



「人は大自然、宇宙とつながっている」と、板橋老師

路自転車に乗って駆けつけてくださいました。全く頭の下がる思いがいたしました。

当日は四百名以上の方がご参集くださり、また講演が終了しても去り難いご様子の方が、たくさんいらしたということは、ご講演くださった板橋老師、奈良先生のお力によるものに間違いのないこと

ではありますが、準備に携わられた会員諸氏の赤心の賜物でもあったと思わずにはいられません。

私たちをここまで奮い立たせてくださったのは、それは他ならぬ椎名老師でいらつしやいます。大所高所で私たちを導いてくださり、全員に感動を味あわせてくださいました。これは心の財産です。

当日の講演は強烈でした。板橋老師、奈良先生とも演壇に立たれたそのお姿を拝見しただけで大きな御慈悲を感じました。

板橋老師のお話はまた意外でもありました。大乘寺僧堂師家との御役職から、さぞ厳しいお話ではと想像いたしておりましたが、坐禅という言葉はあまり使いたくないとおっしゃられたり、また昨今話題の「脳内革命」を引用されての右脳左脳の話題は本当に解りやすく、それでいて坐禅の大切さを言い切られておられました。また仏様のよ

うな御尊顔も大変印象的でありました。

一方、奈良先生は世界の宗教を深く探究された

極めて格調の高いものでした。

奈良先生との出会いで忘れることのできない大きな思い出となったのは、講演会終了後の先生を囲む会にご出席いただけたことでした。

椎名老師のお計らいによって、僭越ながら私は先生の前の席に座らせていただき、親しく話をさせていただくことができました。そしてこれまた椎名老師のありがたいお計らいによりまして、先生の御著書を賜わる榮に浴しました。

世界宗教界に御名の通った先生と過ごさせていただいた二時間余のできごとは、終生忘れることのできない思い出となりました。

板橋老師、奈良先生、そして私たちにとって、かけがえのない師、椎名老師の全てを通して、仏教徒としての生き方のお手本を如実にお示しいただいたと存じ、なんとか本物の修行姿勢に立とうと新たな決意をいたしました次第です。

「禅を聞く会」の思い出

柏市 安本小太郎

禅を聞く会が、当参禅会二五周年行事として、昨年一月四日に柏市にある長全寺で行われた。

チラシ配り、台風のなかでの会場の下見、誘導の仕方、懇親会出席等、多くの場で参加させてもらい貴重な体験をさせていただいた。

前回二〇周年の「禅を聞く会」の時と対比して二、三気づいた事を記してみたいと思います。

まず、チラシですが、今回は柏駅東口で三回行い、百枚くらい配ったと思います。その二回めの時、鳥取の学生時代、同じ寮にいた人に三五年ぶりに会い、そば屋で二時間ほど話し込んだことも忘れられない思い出となりました。

懇親会では畏れ多くも主客である奈良先生の隣に座ることになり、何を話そうかと緊張しました。

料理が運ばれ始めたのですが、魚料理ばかりなので何も手をつけられません。その様子を見られた先生が「ああ、菜食主義ですか」と声をかけてくださいました。先生が結婚した頃の頃、インドに行くというのを、インドに帰ると言

って奥様をびつくりさせたそうです。自称インド屋さんと言われるだけあって、先生はインド各地でたくさんの菜食主義者を見てこられ、すぐに気付かれたのだと感じ入ってしまいました。

やがて植物性の料理が運ばれてくると、二度も先生手ずから取り



身近な例から禅を説かれる奈良先生

寄せてくださいました。その時の白いふくらした手がとても印象深く今でも脳裏にやきついていました。

打ち解けた雰囲気のおかげで、先生との会話は続きました。

「先生は馬に乗られたことがありますか」

「ありません」

「私があります。学生の頃、ある先生が乗馬は相当高い所から地上を見おろすので、下にいる奴が馬鹿にみえるといわれました」

「見下すといえば、昔ライオンズ倶楽部で奉仕について話に行ったとき、その会員が、あの椅子を寄付してやった、あのゴミ箱を寄付してやったと、自慢ばかり

するので、そんなことでは奉仕にならんといつて、私も五〇歳ぐらいで若かったのでケンカしたことがありました」(先生にもそういうことがあったのかとホッとする)

「先生はNHK宗教の時間の聞き役を長くされましたが、どんな人が印象に残ってますか」

「一〇年以上やりました。柴山全慶さんは大変、力がありました。すごいと思ったのは山頭火を世に出した大山澄太さんです。増谷文雄、玉城康四郎両氏、私の先生ですが中村元先生も印象に残る人です。要するに皆さんに自分の宗教を語っていただくわけですから、学問だけをクドクド述べる人は困りました」

「輪廻転生について」

「前世の報いで、今生でこんな悪い状態にあるというのはどうかと思いますが、道元禅師のように自分の内面を見詰めて、この心は過去の自分の業によるという業による高度のものはその通りでしょう。業を認めなけ



懇親会風景

れば仏教は成り立ちません……このような具合で奈良先生からいろいろなお話を聞かせていただきました。

振り返ってみると、二〇周年記念の懇親会では、鎌田先生に何か聞かなければと緊張して、ひとつだけ尋ねたのですが、ユーモアでかわされたことを覚えています。

この五年間に坐禅を続けて、気持ち軽くなり、割合に思っていた事が奈良先生に聞けたのではないかと。慢という煩惱は聖者の位にもあるそうです。言い訳をします。

夏は暑い

柏市 高野千代子

龍泉院参禅会発足二五周年記念講演会も無事円成し、奈良康明先生を囲む懇親会となりました。

大役を無事にこなされた皆様方のホッとした雰囲気では話がはずんでいる時でした。私の隣りの席が空いたと思ったら、寺田健二さんがいらつしやいました。以前、寺田さんには、いつも坐禅の帰りにお車に同乗させていただき、自宅近くまでお送りいただいていた大変お世話になった私でした。

その寺田さんがいつからか、参禅会にお見えにならなくなりました。私の耳に入ってきたお話では、奥様を亡くされたということでした。

あまり親しくお話したこともありませんでしたけど、隣りにいらしたご縁で、私は思い切って痛いお話を切り出し、お聞きしてみました。寺田さんは、淡々と、奥様を亡くされてから、もう九年たつたことを話され、その当時お二人のお子様のうち、下の方は小学校四年生であったとのこと、当時寺田さんの年は、四二歳だったことを話してくれました。

「三年間は、坐禅に出られませ



受付の準備におおわらわ

んでした。兄貴から、坐禅を勧められても出られなかったんです。……と心の傷の深さを話されました。何もかもご存知の椎名老師から、「また、坐禅に来て下さい」といわれたことが、闇の中での一条の光であつたように寺田さんは話してくださいました。

幼かった末のお子様も、一八歳、大学入試に頑張られておられるとのこと。昨日のことのように思われた悲しい出来事も九年の歳月が流れ、寺田さんも五一歳になられたということでした。

若い四二歳の父親が、二人の子供の弁当を作り、仕事に、子育てにと頑張られたその横顔は、奈良先生の本日の演題の中味であつた

「夏は、暑い」そのものでした。お話を聞き終わり、ふと自分を思いました。必要な時だけご好意に甘えて車に乗せていただきながら、寺田さんの九年間の心の痛みを何も判らずにいた自分は何だったんだろう。人の痛みは所詮、人の痛みで自分の痛みにならない現実でした。私には今更お慰めの言葉は出ませんでした。

の暑さ。ただ、ただ、暑い、暑いと右往左往して、愚痴り、怒り、うろたえ、さ迷うのが人間かもしれません。奈良先生は、向こうからやってくるすべてのものを明らかにして、受けいれることが苦しみから逃れる道とお話くださいました。

また、日頃用いない敬語にも惑わされる一幕もあった。今後への課題として、団体客の対応に考慮すべき余地は残したが、大過なく役目を終えて一安心。これも各責任者の方々の周到なプランがあつたからこそ。と同時にその労苦は並々ならぬことだったはず。感謝……。二部の講演が始まる頃には、各係員も予備の椅子を持ちこんで奈良先生の法話を静聴することができた。

留置場からの参禅者

四街道市 大坂 昌宏

平成八年一月四日、感動の「禅を聞く会」が開かれた。佐倉署の留置場を出てから九五日後のことだった。恙なくこの会に出席できたことを妻に感謝する。そして微力ながら受付係の一員として、協力させていただく喜びを味わっていた。

り「……ですが」と名のつてくる。名簿を見ても見当たらない。「お葉書をお持ちでしょうか」、「いいえ……」。「ああ、団体で申し込んでいたんですが……」、ここでやっと納得する。

受付開始直後は、この様なやりとりで余計な時間を費やしていた。その後は要領もわかり葉書を持参していない方には、最初から寺院名を問いただすことにした。どうやらこれでスムーズ。

仕事は、小沼氏の几帳面に作られた予約者名簿と来場者とをチェックすることだった。単純な仕事なので当初は余裕のうちに応待していた。しかし、開演時刻が近づくにつれ津波のように押し寄せる来場者に、慌てふためきはじめた。混乱に拍車をかけたのは、寺院関係の方々だった。彼らはいきな

しかし、また問題が生じた。開演後の空席の把握だった。空席にフリーの来場者を、二階から案内することになっていた。これも小沼氏の労作の座席番号一覧表に、

省みれば「夏は暑いッ」は「飲んでから乗るなッ」だった。この簡単明瞭なことが守れなかった腑甲斐なさ。「魔法の鏡」には、妻の大

切な人は息子。子供たちの父親は？、写らないのだろうか。夫として父として、参禅者として端なくただ赤面するばかり。

「人はお魚屋さん……」に至っては、あの日まっすぐ家へ帰っていったら、あの寿司屋で食べるだけにしていたら、あんなに飲まなかつたら……タラ、……タラ。悔やんでも悔やみきれないのは、あの日の出来事。覆水盆に返らず……。

あの日は、遡って七月三〇日の事故のこと。その翌朝、眠りから覚めると何か異常だった。天井や壁が違う。隣を見ると男が二人寝ている。一瞬、寿司屋に泊まった店の従業員？。それにしても極端に狭い部屋、畳三、四枚。朦朧としながら後ろを振り返った。思わず戦慄が走る。天井から床まで、黒光りの鉄格子が冷たく聳え立っていた。「留置場だッ」「一体何があつたんだッ」「夢……」

これが、泥酔による衝突事故のプロローグだった。その後、自供調書、指紋採取、検察庁、簡易裁判所、罰金というプロセスを経て、二日後釈放。この間、妻が着替えを届け、病院勤務で超多忙の息子は、貴重品入りの鞆を受け取りに足を運んだ。

三日間の拘束の間、全く現実感

がなくなっていた。あたかも夢遊病者のごとく、自己を失っていたのだ。判決を得て裁判所から釈放されるまで、手錠と腰紐から解放されることはなかった。どの警察官も威厳をもって接触してくるのだった。この屈辱は、やり場のない腹立たしさを覚えながらも、忍従せざるを得なかった。

裁判所には、娘夫婦が待っていた。かばそい声で「ごめんなさい」沈黙。思わず目頭に手をやる。娘はいたずらっぽく目で叱っていた。娘婿は、仕事中心のどいつて去っていった。娘は「怪我はなかったの？」と気遣ってくれる。その足で娘とタクシーに乗って佐倉署へ向かった。迷惑をかけた巡査部長に一言謝罪をしたかった。「テープに取って聞かせたかったよ、あの時のあなたの罵声ぶりは」「エッ？どんなことを言っただですか？」「いや、もういいよ、今の貴方をみれば、言わない方がいいよ。これからは頑張つてよッ」何度、お願いしても彼は答えてくれなかった。彼の温情をつくづく感謝しながら別れたのだ。娘は家まで同行してくれた。玄関には、妻が微かな笑みを浮かべながら、無言のまま出迎えてくれた。その表情から、妻に与えたシ

ョックの大きさを計り知るのだった。部屋に入るや妻と娘の前に正座、両手をついて心底より「ごめんなさい」。他に言葉が見つからない。涙がにじんで顔を上げられなかった。

この事故は、飲酒から生じたものだが、根源は「無明の酒」に酔っていたことだった。これまで何をしていたのだろうか。失った時を追うのでもいいが、「現在」こそ大切なことだ。

その日の夜、被害者の青年を訪ねた。謝罪と感謝の気持ち伝えた。「あの時、あなたが私を追いかけてくれなかったら、私はどうなっていただろう。それを考えるとあなたは私の生命の恩人です。ご迷惑をおかけしました。そしてありがとうございました」「ぶっつけられて生命の恩人だなんて……。でもそう言われればそうかもしれないなア」こう言い終えると青年は微笑んでくれた。

時が流れ、九月の参禅会の早朝を迎えた。台風と重なって風雨が激しく、外出するには誰もがためらうような朝だった。その時まで、坐るのだ、懺悔するのだ、愚かさから脱皮するのだ、ここで逃避したらますます愚か者に墜ち入るかもしれないのだ、と迷いから抜け

だせないでいた。妻に葛藤する心をうちあける。妻は、即座に「行きますよう！私も一緒にいきます」この一言と悪天候が決断させてくれた。嵐さえ正しく試験だと思ふのだった。

このような経緯を経て、一月四日の「禅を聞く会」を迎えた。「留置場」という余韻から未だ抜けきれないでいた時、少なからぬ感動と安らぎを得たことは言うまでもなかった。奈良先生の温和な表情の中に秘めた鋭い眼光は教える。

「無常を観つめ明らかにし、生きがい求めてゆこう」

「そうだ、未だ潜んでいるであろう愚かさから脱皮するのだ。その努力こそ生きがいかもしれない」留置場からの参禅者ははじめて「闇」から訣別し、「明」を観るのだった。「二五周年記念行事をありがとう……。」南無。



折にふれて

柏市 神戸 はぎ

一月四日、長全寺様で二五周年記念行事として「禪を聞く会」の開催に私にまでお知らせをいただき有り難うございます。

孫達が成長し部屋も足りなくなりましたので改築する事になり、一月三日が仮の家に引越で、四日から解体なので一寸無理かと存じましたが、娘がこの様な機会にぜひ出席を、と申してくれましたので出席させていただきました。

主人もきつと喜んでくれる事と存じます。

先日、何気なく俳句にもなっておりません様な句を書きました。『明珠』に如何ということ、お恥ずかしうございます。『明珠』には御立派な方がお揃いのごとで、『明珠』を汚す様なことになりました。八六歳を過ぎまして思うように作れなくなりました。この中から一句くらいお選びいただければ有り難い事でございます。

夫を看る夜昼無くて明け易し

病気の看護でございせん入院前、前立腺の為トイレに通うのが多く、夜は五、六回で寝起きが

大変で、その度手助けしますので眠る時間がほとんどございせんでしたが、主人はすぐ眠りますので有り難い事です。

蟬の羽化見届け夫の七七忌秋立つや穿く人あらぬ靴磨く十薬に心の波を沈めけり客去りて遺影に語る十三夜一晩は主なきままに小豆粥児も真似て坐蒲に足組む道元忌

つまらない事を書いてしまいました。おゆるし下さいませ。何卒御自愛遊ばしましてお健やかなの様にとお祈り申し上げます。

かしこ

元参禅会会員の故神戸正様の奥様の神戸はぎさんからのお手紙です。ご本人のご了承をいただいでご紹介する次第です。(小畑)

小心和む禪講話

取手市 斉藤 弘

「左脳の働きを抑えるのが瞑想である。」

「禪は平気に死んでいくことを教えるのではなく、平気に生きていくことを教える。」

これは「禪を聞く会」の講演の

中で、心に残った言葉のほんの一部です。大変良い、心温まる講演会でした。

私事になりますが、私は昨年三月に三〇数年勤めた教員生活を定年退職致しました。その後は嘱託として勤めていますが、現役の責任の重さと比べれば、全く気楽にやらせていただいています。

それでも、定年という大きな変化のなかで、はつきり意識せずともどこかで心の支えを求めているのかも知れません。「禪を聞く会」はそうした心を充分満たしてくれました。

私はこの日いつになく心豊かな思いで帰宅しました。

帰宅したあと、ふと浮かんだ俳句をノートに書き留めました。

禪講話小心和む小春かな

身にしむる禪の一語や職退いて

先日、友人の寺田さん(参禅会々員)に葉書を差し上げた際に、この拙い句を書き添えました。このことが「明珠」の原稿依頼につながろうとは……。

人の縁、人の出会いの不思議、その素晴らしさをつくづく思う今日この頃です。

一泊参禅会の案内

日時 六月七、八日
場所 大雄山最乗寺

例年、薫風さわやかな季節に実施されます一泊参禅会は、二日間に亘って坐禅と簡単な作務、そして、椎名老師のご講義、伺う先のご老師より法話を頂戴しております。在家でありながら、住僧の生活の一端を体験できる貴重な機会でもあります。

今回の最乗寺は一三九四年に了庵慧明禅師により開山。その土木工事の大役を果たした道了薩捶が天狗に姿を変えて、お山を守る修道の場です。箱根の外輪山の中腹にあり、広大な寺領に、老杉生い茂り靈氣満ちた古刹です。

昭和六三年、今から一〇年前に一泊参禅した時、余語翠巖老師がご存命であり、「現成公案」の法話をいただき、会員皆感銘を受けたことを覚えています。定例の参禅をより深く豊かにするために、奮ってご参加くださいますよう、ご案内申しあげます。

— 詳細後日 —

追悼

謹んでご冥福を
お祈り申し上げます

高間大先輩を偲ぶ

我孫子市 三町 勲

参禅会の二五周年に当たる年に高間大先輩は逝ってしまつた。あたかも、参禅会の基盤は充分にでき上がったことを見届けて、安楽の境地に旅立たれたように思われ、仕方がありません。そして、今もわれわれの背中を励ましの言葉をかけてくださるような気がします。

二月の末の暖かい日に、高間先輩の仏前にお線香をたむけ、手を合わせていると、仏壇の高間先輩の遺影がいつもの暖かいほほえみを浮かべておられた。他人に対して、分け隔てのない慈愛に満ちた態度、いつも一歩下がった位置か



故 高間利介氏

ら皆を見守っておられる謙虚な態度、会に対して私欲のない支援など、永年の修業の中からにじみ出た生活態度は、われわれ一生通じて体得できるだろうか。私は、歳を重ねるにつれ、高間先輩の影のような生き方に魅力を感じます。「うちの人は、何も残していかなかったの」と淡々とおっしゃる奥様の言葉の奥には、常に他人のためという高間先輩の生活信条がうかがえます。「仲々いい本はないものですね」とおっしゃりながら、お会いした時には、われわれに本をくださる。色々ご自分で読まれた中から選び抜かれたもので、本の重みを感じ読ませていただいたものだ。こんな時、高間先輩の人生の重みも一緒に感じたものです。

高間先輩が晩年にまとめられた『父と行く』を読ませていただいた時、高間先輩の親をおもう心と努力に今一度驚かされました。ご自分が闘病の中にありながら、父の病床を見舞う手紙を二日か三日おきに出しておられる様子が綴られています。奥様の内助の功もさ

ることながら、「日は好日、病気に安住」を心に決めこんで、常に平常心を保ち続けておられたことがよくわかります。

もう高間先輩が逝かれて一周忌を迎えようとしています。しかしわれわれの背中にはいつも高間先輩がおられるような気がします。高間先輩のお宅を訪ねて玄関を入ると、いつものように着替えをされて、二階からとんとんと降りて来られるような錯覚をすることがあります。

七〇余年の高間先輩の人生の重みをずっしりと感じながら、青年から成人の域に入ってゆこうとしている参禅会を発展させることが、高間先輩への一番の供養になるのではないのでしょうか。

ご縁を偲んで

柏市 高野千代子

私が三〇余年の仕事を終えたのは、昭和五八年のことでした。一人で家族の生活を背負い続けた私が職場を去った時には、大事な家族であった母が三年前に、そして続いて父がこの世を去りました。掌中の玉であった一人息子も結婚を機に独立して家庭を持ち、私の許を去りました。家族のために一

生懸命に働き続けた私の弓の弦は方向を見失ったかのように緩み、人生とは、と大きな無常の壁に立ちだかれた時、高間さんとのご縁をいただいたわけでした。

私の家も曹洞宗であり、幼い頃から両親がまず仏様にお茶とご飯を供え、手を合わせるのが日課でした。その年、広池学園での教育者研修会に参加させていただいた時、モラロジー柏事務所の教育者部会でご活躍の高間さんと、同じテーマの分科会で初めてお会いしました。そして、沼南の泉に龍泉院という寺があり、そこで毎月坐禅会をしているということを知りました。

人生の無常感が日に日に深くなっていく私は、坐禅に心引かれ龍泉院の参禅会へのご縁が生まれ今に至っております。思えば、あの時高間さんとの出会いがなければ、ただ、ただ、前を向いて走るだけで毎日霞ヶ関駅と柏駅の往復を繰り返すのみの柏都民であった私には、参禅会へのご縁は生まれなかったと存じます。

釈尊は縁起を説かれ、すべてのものは、縁によって輪廻していることを示されましたが、私は高間さんによって、仏縁の種子をいただき、ご老師のお導きにより、少

しずつ、少しずつお花をいただいているように思われます。

思えば、高間さんは、ただ、ただ人を愛し、そのための行を実践された羅漢さまであつたように思われます。今はただ、会員の皆様と共に、改めて手を合わせ、ご冥福を心よりお祈りさせていただきま。高間さん、お導き本当に有り難うございました。 合掌

富田文子さんを偲ぶ

松戸市 小畑 節朗

平成八年の暮れも押し迫つた二月、椎名老師より、この年の八月に富田さんが亡くなられたことをお聞きました。ご遺族からのお知らせとの由で、知らぬこととて大変失礼をしていたことであつた。

富田さんは足の関節を悪くなすつてしばらく参禅されていなかったが、昭和五〇年代には遠い印西



故 富田文子さん

町より熱心に通つておられた。

昭和五八年より始まつた「成道会」に温かい「けんちん汁」を武山、平沢の女性お三方で作つて下さつておいしく頂いたことが昨日のように思い出される。

富田さんは、島根県大原郡木次町のお生まれで、平成二年四月発行の「明珠」一一号の「小学生の日曜学校」に幼い頃の思い出を美しい文章で綴られていて、海棠の太木薄紅色の花が咲く洞光寺の風光が語られている。そしてこの洞光寺での仏法の出会いが龍泉院の参禅への道と同じ道であつたと述懐されておられるのであつた。その一文の最後に「最近つれづれに作つた歌です」として、

春菜里よりとどき

くりやにて 花咲きおりぬ

黄あざやかに

と鮮やかな歌が記されている。ありし日を偲び、報土の莊嚴とご冥福を念じ、諸仏の洪名をお誦えする次第であります。 合掌

《第一四回成道会》 円成す

昨年二月八日、釈尊の悟りを開かれた日を祝つて、成道会が龍泉院本堂において、とり行われました。当日は報恩坐禅に始まり、椎名老師を導師として、今年も会友配役により円滑に進行し、厳かな成道会となりました。

法話に先立ち、椎名老師より参禅二〇年をお祝いして、寺田哲朗氏に記念品の授与があり、大きな拍手がわきました。

以下、法話の要旨

二九歳の時、王城を出て修行生活に入ったゴータマ・シッダルタ（後の釈尊）が、六年の苦行を捨て

て三五歳の時、菩提樹下の坐禅で無常を自覚、このお悟りが以後の仏教徒の目ざすところとなる。

釈尊は最期に「すべては無常である。怠ることなく実践し完成してください」と言い残した。

我々は仏教の原点に返つて自分の実存の上にその教えを生かしていかなくてはならない。一時一時に自らの非を悟り改めていくことが出家在家を問わず仏教徒の道であり、それを毎日の生活の中で実践できることを感謝して生きていくことが大切。…と本来のお釈迦様の教えに立ち返ることを説かれた。

経てみれば つい先日の一〇年

千葉市 寺田 哲朗

この度は参禅会二五周年の成道会の佳き日に、

樹下 涼風

賛 寺田哲朗居士之参禅廿年

平成八年佛成道之令辰

龍泉院卅一世 大心宏雄 叟なる大額を賜わり大変嬉しく、かつ有り難く存じます。



心にしみる椎名老師の法話



上：第14回成道会参加者一同



左：贈られた額を前に喜びの寺田さんご夫妻

道友の武田さんが表装をしてくださったとの事。裏に「武田表具店」のシールを付け、家宝にさせていただきます。ご老師様より、この語の意味する所を承り、その様になりたいと座右銘をいただきたいと思ひます。高野さんには「半分は奥さんの協力のお陰ですね」と言われ、その事も家内に話しました。小生はもちろん、家内もこの筆の勢いに感動し喜んでおりました。

実は「はからずも」といえば嘘になりまして、故高間様、小畑先輩、森岡先輩が「全機現」等々の額をいただかれた時、いいな、小生もあと何年かな、と内心掛ける場所を考えたりしておりました。諸先輩のような陰徳もないのに、

我ながらおめでたいのか厚かましいのか。
それにしても、入会も退会も自由、会費会則もなしにも拘わらず、初めに来たときの年月まで覚えていただいていたのには恐れ入りました。当時はまだ上山名簿が備わっていない

かった訳です。その割りには我々は文字通り自由に入出入り、欠席させていただいている事を今さら思う次第です。

初めて到着した時の事は昨日のように覚えております。御老師様は作務着で庭掃除をしておられましたので、お寺の行者さんかと間違えてしまい、提唱の時になつて御住職と分かりました。

ご提唱は「覚阿上人に与ふる法語」。九州の菊池の殿様が「大智禪師に参禅された時にいただいた一三四年の記録なのだそうです。

「生死の大事を了畢せんと思はば、まず無上の菩提心を発すべし。菩提心は無常を観るの心、是也」とありました。初心の気持ち大事にしなれば、と思う次第です。

「長いだけでいい気になつたら駄目。初心の決意が大切」と御老師様は時折坐禅の初めに言われます。何か自分の心境を見通されているようで、この語に励まされつつ今までできてしまいました。経つてみれば何だかついこの間のような感じであります。

これからもご指導に預かり、また道友の皆様と仲良くやってゆきたいと思ひますので、何卒よろしくお願い申し上げます。 合掌

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成九年三月より「慇懃」の巻を提唱
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月七日）
釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

参禅会記録（中は座談の司会者
平成八年

- 一〇月二七日 三六名
（寺田 哲朗氏）
「禅を聞く会」会場下見会
- 一〇月二四日 於・長全寺
「禅を聞く会」 三三名
（松 井 隆氏）
- 一二月八日 第一四回成道会 三五名
導師 椎名宏雄老師
総幹事 小畑 節朗氏
成道会幹事 沢村 国勝氏
小 沼 亮氏
写真撮影 中 寫 宏誠氏
●一二月二二日 二五名
（遠 藤 剛氏）
- 一二月二九日 龍泉院スス払い 一六名
平成九年
- 一月二六日 三一名
（加 藤 孝氏）
- 二月九日 新年会 二二名
於・柏駅前芳野屋
三〇名
（五十嵐嗣朗氏）
- 二月二三日 二七名
（杉浦上太郎氏）
- 三月二三日

●発行 行/天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81
●印刷 岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45

●電話 0471(9)1609
●FAX 0471(43)3131

- ▼お手伝いならと軽く引き受けた「明珠」の編集。いつのまにやら杉浦氏より「行と心得よ」とバトンタッチと相成り候。
- ▼杉浦さん、長い間、名編集、本当にご苦労さまでした。
- ▼仏法の右も左もわからぬ新参者ですが、「明珠」の格調を落とさぬよう、武田氏と協力してお役に当たらせていただきます。叱咤激励の程よろしく。
- ▼大坂氏の大いなる懺悔に感服！
- ▼年末大掃除には、暮れ押し迫ったにも拘わらず一六名参加。椎名老師自ら育て、漬けられた沢庵のおいしかったこと！（牧野）
- ▼当参禅会に來られて日の浅い会員、二〇年以上のベテラン共々力を合わせ成し遂げられた記念行事。熱意の力と大きさに驚嘆。
- ▼政安さんが寄稿された「死線をさまよって」の後編は著者の希望により掲載いたしました。
- ▼二〇周年というイベントの多い昨年度の年番幹事を見事に果たされた沢村国勝氏と小沼亮氏に深く感謝。平成九年度の幹事に宮内守氏と加藤孝氏が就任。よろしく願います。
- ▼「明珠」編集の新米にとっては会員の皆様の原稿が頼り。今後とも宜しくお願いします。（武田）